

# たまのよこやま

(財)東京都埋蔵文化財センター報 No.8 昭和61年6月16日



板 碑 群



老サルスベリ

## 老サルスベリのひとり言

私は樹令四〇〇年を経たサルスベリです。戦国時代の大石信濃守宗虎の居館があったとされる伝承の地に今なお住んでおります。大石の殿は青梅の三田の殿と共に、小田原の戦国大名、後北条の殿の関東総支配の野望に抗戦し、滅されました。私はその頃に生まれ、今では樹高十五mの太木となりました。

中世は土地領有をめぐる武家の争いの絶えない時代で、このため各階層に仏教が浸透いたしました。

板碑と呼ばれる石塔は、武家や有力農民層の墓地にたてられた供養塔で、武蔵では秩父産の石材が主に使われています。当時の多摩地方では、墓地は屋敷地内につくられるのが一般的であり、板碑は元来各地に散在していたものと考えられております。

四月から展示ホールの正面に、大丸城跡で調査された板碑群が立体展示されており、五輪塔と三十以上の板碑が中世のある時期に、元あった場所から移動して集積されているそうです。元の場所には何が起ったのでしょうか。

最後に開発により生々流転の旅を終え、ここに至った板碑群。長年月の世の移り変わりを見てきた私にとって、遺跡保存のむずかしさを考えさせられる昨今です。(加藤)

## 映画と講演の会

四月二十八日、ガーデンシティ多摩86の参加行事として、当センター職員館野孝、千野裕道による「原始・古代の祈り」・「縄文人と森」の2つの講演を行い、



講演会

同時にセンターの創立五周年を記念して制作をした記録映画「丘陵の中の歴史」の初公開がありました。



五周年記念映画

## 展示ホールの展示替え

展示ホールが四月より展示替えとなりました。正面の板碑群の模型は、実際に発掘された遺跡の地形を復元し、そこに、本物の板碑を発見されたままの状態で見せました。(巻頭写真左)制作は当センターの植田孝君の力作です。今回は古代、中世を中心とした展示であり、廊下の展示コーナーには絵巻物のカラーパネルも掲げさらに解りやすい展示をめざしております。

## 昭和六十一年安全衛生推進方針

一、スローガン  
全員参加で、  
災害の減少をはかろう  
二、年間目標  
1、重大災害……ゼロ  
2、休業・不休……半減  
以上の目標達成のため特に、土砂崩壊・重機等による重大災害の防止、機械設備の安全確保はもとより、転倒・無理な動作等作業行動による多発災害の安全対策の推進をはかる。

## トピックス

二月十二日 これからのセンターの資料・情報の整備の迅速化などを目指し、OA委員会が発足しました。  
三月三十一日 ヘドロジスト野外見学会が当センターを起点として、多摩丘陵の地形と地質を対象に行われました。



ヘドロジスト野外見学会

四月二十六日・二十七日 日本考古学協会春季総会が駒沢大学で開かれました。当センターからは、佐藤宏之・比田井克仁調査員が「東京都多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査」について研究発表をしました。  
四月二十一日 ケンブリ

大学ポール・バーン氏が当センターを訪れ、日本考古学の地域研究の現状を視察されました。

五月一日 稲葉秀三氏ほか十名の東京都顧問の先生方が来館、副館長、水上理事長、高橋常任理事の案内で展示ホールを中心に視察されました。

## 多い小・中学生の見学

四月、五月は地元多摩市、稲城市、八王子市の学校の児童生徒が学年単位でセンターの見学にやってきました。説明にあたる職員に質問したり、熱心にノートをとる子どもたちの姿がみられ、ふだんは静かな展示ホールには「過去」と「現在」との対話がくりひろげられています。

## 大石氏の城跡発見か

四月より調査が始まっている八王子市松木のNo.107遺跡で、幅3mもの大きな中世の濠が発見されました。この遺跡の周辺は古くより

戦国大名、大石氏居館の跡といわれ、関係者は、それに付属するものではないかと検討をしております。

## 人の動き

▼総務課施設係長の大久保宗光さんが四月一日付で南多摩開発本部宅地造成事務所に異動、その後任には南多摩開発本部宅地造成事務所より渡辺正行さんを迎えました。また同じく経理係の亀山正史さんが三月三十日付で退職され、後任として四月一日付で野村孝之さんを迎えました。  
▼調査課小林深志さんが三月三十日付で退職され、四月から長野県茅野市立博物館へ。後任として、四月一日付で、長佐古真也さんを迎えました。

発行  
財団法人 東京都埋蔵文化財センター  
〒206 東京都多摩市落合 1-14-2  
☎ 0423-73-5296  
0423-74-8044  
昭和61年6月16日



今回は、昨年の9月から今年の2月にかけて調査を行いました。No.3253遺跡を紹介いたします。

遺跡は、八王子市鎌水に所在しており、ちょうど多摩美術大学の東側裏にあたる谷に面した緩い斜面に立地しています。

調査の結果、縄文時代・平安時代後期・近世以降という、大きく3つの時代にわたる人間の残した様々な行動の跡や、生活の痕跡を認めることができました。時代別に検出した遺構と数をあげますと、縄文時代(土坑10基・集石

6基) 平安時代(竪穴住居跡7軒 後期) 掘立柱建物跡 3棟・土坑23基・ピット多数) 近世以降(馬埋葬遺構1基・井戸跡2基、道跡・段切り)

がありまして。特に、この遺跡の平安時代後期の遺構・遺物は、多摩でも、まだ例の少ないもので、ここではそれらについて述べることにします。

写真1は、空から平安時代の遺構を写したものです。が、住居跡と建物跡は、写真の右と左の2つのグループにわかれていることがわかります。まん中の遺構のないところは、菜園(畠)のようなものがあつたのかもしれません。

竪穴住居跡は、地面を方形ないしは長方形に掘り窪めて柱を立て、屋根を葺く構造で、この遺跡の住居にはすべてカマドがすえられていました。

7軒の住居跡のうち5軒は、普通の住居跡のように

壁側に設けられていたが、他の2軒は、住居の中央部に設けられており、特異な構造であることがわかりました。

このうちの1号住居跡を例に見ますと、一辺約2mの、方形の竪穴の中央に、穴を掘って、そこに石を組み合わせ、粘土で覆ってカマドを築いておりました。

発掘した時は、破壊されており、使われた当時の状態のままではありませんでした。中から、食器に使われた坏や碗や、煮炊きに用いた甕などの土器が出土しました(写真2)。このように、規模の小さい竪穴住居の中央に、立派なカマドがあつては、日常の生活を営



2

ものに支障を来すと考えられます。平安時代や鎌倉時代の絵巻物を見ますと、住いとは別のところに、カマドを設けている例があります。1号住居跡のような構造の住居は、人が階段住むためのものでなく、煮炊きをするためだけに使ったものと推定されています。このような施設は、次に述べる掘立柱建物に付属するものではないかと考えられます。

掘立柱建物跡は、地面に柱のはいる穴を掘って、その中に柱を立てて上屋をつくる構造で、柱間の数と長さによって建物の大きさを知ることが出来ます。ここでは2×2間の正方形のもの1棟、2×3間の長方形のもの2棟検出されました。

次に、出土した遺物としては、多数の土師器甕と坏、少数の須恵器、また愛知県から岐阜県にかけての窯業地帯で焼かれた灰釉陶器の皿・瓶などがありました。土器のほかには遺物として、



3

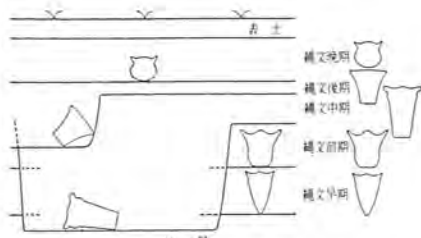
鉄製品があります。2号住居跡からは、鉄製のクワ、スキ先が出土しました(写真3)。身や柄は木製のため、残っていませんでしたが、U字形をした鉄製の刃は、完全な形で残っていました。他に鉄製品としては、鉄鏝や鉄鏡などがあります。また、鉄を精錬する時に出る鉄滓も出土していることから、ある程度、村の中で野鍛冶を行っていたものと推定されています。

この遺跡は、平安時代後期に人々が定住し、一つの村をつくっていたことが明らかとなりました。しかし、村として存続した期間は、それほど長くはなく、村人は武士の時代が到来する以前に、他へ移っていったものと考えられます。(飯塚)

文化財講座<6> 年代を知る“ものさし”

遺跡から発見される遺構や遺物を目的にしたとき、大方の関心事はそれが、いつのものかであるかということではなからうか。考古学においても、それらの年代を決めることは大変重要なことで、いつのものかわからないままでは研究を進めることができないから、年代の決定は調査・研究を進める上での出発点ともなっているのである。

近年、自然科学の応用による年代測定方法の開発などがあつて、いろいろな方法で年代の測定が行われているが、考古学がこれまでに行ってきた方法は、基本的に層位学・型式学と



層位学による土器型式の編年(鈴木1976による)

いう二つの方法をよりどころにしている。この二つの方法によって得られる年代は、今から何年前という具体的な数字によって表わすことができないが、遺物のそれぞれの先後関係を知ることのできる正確な“ものさし”としては、自

然科学の発達した今日といえども、まだまだこれに替るものはできていないのが現状である。

では、これらのものさしはどのような方法で作られているのであろうか。

層位学による年代のものさしは、地質学という地層の上下関係を手掛りとする。

すなわち、地下に埋もれている遺構・遺物は、攪乱が及んでいない限り、下層のものほど上層よりも古いという新旧関係にあるから、この関係を調査に適用することによって一つのものさしができる。これが層位学による年代のものさしである。ただ、実際のものさしを作るにあたっては、この二つの方法が併用されてより正確な一つのものさしを作られていくが、このような方法によって作られたものさしの一つが縄文土器の編年で、小さな破片からでも年代がわかるほど精緻にできている。縄文土器の研究が世界に誇れる所以である。(可児)

多摩の歴史を訪ねて⑥

当センター所在地の今昔 当センターが所在するNo.57遺跡は、典型的な縄文時代の集落として、遺跡調査会の発足当初から保存が要望されてきた。

当遺跡の調査は、昭和45年に高圧送電線の鉄塔移設工事、昭和48年には、北側縁辺部が小田急多摩線の建設にともない発掘調査された。さらに、昭和57年には、遺跡の西側部分が当センターの建設候補地となり、試掘の結果、遺構・遺物が希薄なため本調査後、建設に



昭和45年当時のセンター地



現在のセンター地

踏み切られたものである。当遺跡は先土器時代、縄文時代早・前・中期の遺構・遺物や江戸時代末期の墓地などの複合からなるが、特に縄文時代前期開山式期の住居跡、中期末の加曾利E式期の敷石住居跡などが注目される遺跡である。

こうした成果を集約し、広く見学者に公開する縄文時代の景観を模した遺跡庭園作りが、十一月完成を目途に、現在すすんでいる。今、この2枚の写真に象徴されるニュータウンの面貌に、今昔の感を禁じ得ないのである。(上條)